

Title	計画8-3 黒部川流域に生息するニホンザル地域個体群の動態(ダム建設に伴う遊動域の変動)(VI 共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	赤座, 久明; 加藤, 満
Citation	霊長類研究所年報 (2001), 31: 139-139
Issue Date	2001-10-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/165642">http://hdl.handle.net/2433/165642</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

U群はヒトを恐れ観察者に会おうと警戒音を出して逃げる。しかし、最近のフン分析によって判ったことは、U群に接近しているオスが時々野荒らしをしていることが判った（浅沼、私信）。M群とU群の生命表を書き上げられる資料をとり、サル保護・管理のための一助としたい。

### 計画 8-3

黒部川流域に生息するニホンザル地域個体群の動態（ダム建設に伴う遊動域の変動）

赤座久明（富山県立新川女子高校）・加藤 満（愛知県立旭野高校）

富山県宇奈月町の黒部川流域に生息するニホンザル自然群を対象にして、ダム建設に伴う遊動域の変動を調査した。

宇奈月町下立から笹平までの黒部川流域 13 キロの区間で 10 群を観察記録したが、このなかの 1 群は冬季調査の際にダム左岸で初めて観察した新群である。99 年 10 月にダムに貯水が始まってから、ダム周辺に生息する ON 群、MO 群、MT 群はホームレンジをダムより下流側に大きく拡張させたが、今回の調査では、MO 群と MT 群のホームレンジは前年と変わらず、新たな下流への拡張はなかった。一方、3 群のうち、最も下流側に位置する ON 群はホームレンジを、黒部川に沿って下流方向へ 1100m 広げた。この群れのホームレンジは 99 年度調査では、前年より 1800m 下流に拡張したことを観察しており、2 年間で約 3 km という下流側への急速な下降が記録された。ダムの貯水開始以後、上記の 3 群が下流方向へホームレンジを移し始めている一方で、98 年度調査で初めて識別された DA 群は、上流側からダムの中央部へ進出して、ここに滞在する時間が増加している。また、冬季調査で確認した新群も DA 群と同様、ダム完成後に上流から下降して来た群れと考えられる。ダムにより下流域にホームレンジを移行させる群れの後へ、上流側から新たな群れが移入するということに、隣接する群れでホームレンジの連鎖的な変化が進行している。

### 計画 8-5

中高度域にすむヤクシマザルの食性と人口学的資料の収集

好廣真一（龍谷大・経営）・大竹 勝

ヤクザル調査隊は、1988 年から毎夏、屋久島西部の瀬切川上流域の大川林道終点付近、標高約 750m～1350m にすむヤクシマザルを継続調査してきた。植生は照葉樹林・ヤクスギ林移行帯である。群れの正確な分布と、群れサイズ、性年齢構成を毎年記録して、屋久島中高度域における個体群動態のメカニズムを明らかにする。本年は、7 km<sup>2</sup>の地域を 54 人で調査した。このうち左岸の 4.25km<sup>2</sup>は林道が入って植生が攪乱され、右岸の 2.75 km<sup>2</sup>には自然植生が残されている。

左岸では、1988 年以来 4 群が確認され、毎年の遊動域もほぼ一致しているが、昨年までは群れの識別が不確実であった。本年は一部の個体識別と継続追跡により群れを識別した。各群のサイズと、0 才児数／オトナメス数は、HR 群：24、2/8；P 群：15+、4/5；OM 群：12、2/3；SY 群：19、2/7 で、出産率は 42% (10/23) であった。

右岸では、調査域を誘導域の一部とする 5～8 群を確認・確定した。観察はいずれも断片的で、群れ分布を推定できず、群れサイズと性年齢構も不明である。

確認された食物は、ハイノキの葉と未熟果、ヒサカキ・ヒメヒサカキの果実、キノコ、ヒメバライチゴの葉、ウスバキトンボ、サワガニであった。